



ヒット書籍  
編集者に聞く

「人間はそこまで手を出すべきか」インフルエンサーを捉えたテーマ」

2007年5月の刊行から、40万部を超えるベストセラーとなつていますが、「ここまで部数が伸びた一番のきっかけは何でしょうか？」  
「刊行してから立て続けに、いわゆるアルファブローガーにブロードで取り上げてもらったことですね」  
「アルファブローガーに対して、何か働きかけをされたのですか？」  
「全く、こちらは何もしていないんです。一番決定的だったのは、小剣勇さんのブロードで書評を掲載していたことなんです。他にも様々な方が取り上げてくださって、結果amazonの総合ランキングで上位に入ることができました」  
「書店巡りなどもされた？」  
「著者の福岡先生と2人で、3日かけて部内初軒をまわりました。手作りのポツプツを持って、他には、内田樹さんと浅木健一郎さんに、ゲラの役柄で帯文をお願いしました」  
「今度の部数拡大には、インフル



「前を向いて強く生きていくためのヒントは、依然求められている」

多くの著書を出されている江藤啓之さんですが、新刊のテーマ設定には、誰を悩ませたものではないでしょうか？  
「第一の目的は、これまで江原本手に取ったことのない人たちにも読んでもらえる本をつくる、ということでした。そのため、ポイントを書く必要があった。そこであまり中心に据えて話されなかった、ソウルメイト」を挙げました」  
「ソウルメイト」とは、  
「一般的には『どこかにいる、赤い糸で結ばれた人』というような意味で使われることが多いんですが、江原さんは「その人の人生に何らかの影響を与える人物は、みな比喩的の、ソウルメイト。なんです」と、そこで、家族や友人や仕事の仲間など、あらゆる絆をテーマにして、「ソウルメイト」の意味を考えていけるものになったら、と提案しました」  
「ソウルメイト」は、サブタイ

エンサーの力が大きかった？  
「作家だったブローガーだったり、影響力の強い方々にまず高い評価をいただけて、そこから一般の読者へ波及していったように思います」  
「アルファブローガーたちには、何が響いたと聞かれますか？」  
「分子生物学の断片的な情報は、実は世間にあふれているんです。たとえば、遺伝子組み換えに関する報道など耳にするのも多いですね。そういうことについては、そこまで（人間が）手を出していいのか、というような困惑とした懸念は、ブローガーに限らず多くの人が持っていると思います。そのあたりをすくい取れたのかも知れません」  
「他の科学関連の書籍と異なる点はなんでしょか？」  
「圧倒的な文章の上手さと構成の見事さだと思います。内容については何も新しいことが書かれてないという指摘もあります。けれど、「生命とは何か」という問いが深く疑問に対して、今、分子生物学はどう答えるのかを真正面から論じたものは、ありそうでなかった。しかもそれを読書という形で読みやすく書いたら、ということ、やはり文章力の果たすところが大きいと思います」

トルにも入っていますね。  
「ソウルメイトって本当は何が知りたい人は、実は多かったはず。でもそれをメインタイトルにするという取りにくくなる読者もいると思います。メインは明快な言葉に、そしてサブに読者をひきつけるポイントとして、ソウルメイト」を入れました」  
「他の江原さんの書籍とどのようになら異質化を聞かれたのでしょうか？」  
「いくつかポイントがあり、前にお話した、テーマの絞り方がひとつ、それともうひとつは体裁です。これまでは、主に女性を意識した装丁が多かった。ですから、男性は手にしづらかったのではないのでしょうか。今回は、初代、現代の男性にも自然に手に取ってもらえるような本にしたいと考えて、昭和の文芸書をイメージした装丁にしました」  
「2008年も、「どう生きるべきか」をテーマにした書籍の発行は衰えずに続くと思われませんか？」  
「まだまだ不安定な世の中ですから、年齢や性別に関係なく、求められていくと思いますよ。スピリチュアルに限ったことではなくて、単純に人が前を向いて強く生きていくためのヒントが、依然求められていると感じますね」



「生物と無生物のあいだ」  
福岡 伸一 著 講談社  
777円(税込)  
生命とは何か? 誰も予想しなかったこの世に、いま分子生物学は777年ぶりの第一歩一歩の研究者が手探りで文藝力でつづった、誰も読めなかったかもしれない「命」の科学エッセイ。第2回ヤングリサーチ賞受賞書。



講談社  
現代新書出版部  
川治 豊成氏

2002年入社。現代新書出版部に配属され、現在は、PUB「本」や思想誌「NATIO」の編集にも携わる。最近読んだ本は「植物の成長の日記」(佐野真一著)、「びんごの心」(中野実著)など。

小学館  
「女性セブン」編集部  
下山 明子氏

入社以来、「女性セブン」「産婦人科」(DAME)編集部を経て、2年前に再び「女性セブン」へ。書評企画も数多く手がけ、「少年Aの告白」(フレッド・ヒューズの著)、「アフリカデザイン(雑誌)」などを担当している。

